

南太平洋の道化の文学

——エペリ・ハウオフアの『タイコ島人の物語』について——

安 川 昱

小説という文学形式は、概ね18世紀のヨーロッパにおける中産階級の勃興と市民社会の成立を背景として生まれたもので、19世紀に発展を遂げたが、20世紀の中葉になると衰えを見せ始める。そして小説の主流は、中南米、アフリカ、カナダ、カリブ海、オーストラリア、ニュージーランド等、旧植民地の作家達の手に移った観がある。しかし、太平洋の島嶼国にはまだ小説を生む社会的条件は十分に整っていない。そのため、詩や演劇と違って、太平洋には小説の名に値する作品はまだ少ない。このような状況にあって、サモアのアルバート・ウェント¹⁾とトンガのエペリ・ハウオフアの存在は際立っている。近代小説の方法による重厚なウェントの作風と、風刺的で戯画的な手法を駆使するハウオフアの作風はまことに対照的であるが、二人は西歐的な小説の技法によって南太平洋の現実を描いたすぐれた小説家である。太平洋ではまだ彼等は例外的な存在と言うべきであろう。

エペリ・ハウオフア (Eveli Hau' ofa) は、1939年バプアニューギニアのサラモ (Salamo) でトンガ人の宣教師の両親のもとに生まれた。トンガ、バプアニューギニア、フィジー、オーストラリア、カナダで教育を受け、カナダのマギール大学から修士号を、そして1975年にはオーストラリア国立大学から社会人類学の博士号を取得した。こうして、太平洋地域随一の知識人として尊敬されているハウオフアは、1978年から81年までトンガ国王の代理秘書官兼王室文書館長を勤めた。1981年から USP (The University of the South Pacific 南太平洋大学) で教鞭を執っていて、現在社会学教授で、かつ学部長の要職にある。

ハウオフアはこれまでに小説を2冊出版している。第1作は『タイコ島人の物語』 (*Tales of the Tikongs*, 1983²⁾) で、この小説は南太平洋の架空の島国タイコ (Tiko) の社会と政治、住民の生活と行動を描いた、内容的に一貫性のある、ユーモア溢れる12の短篇から成っている。この作品には、我々の世界を逆さまに眺め、人間の行動の馬鹿馬鹿しさを笑う自由な精神の持ち主が登場する。彼の手にかかれれば植民者も先住民も善意の外国人も教会の牧師も役人も観光業者も皆、笑いの対象となってしまう。ハウオフアはこのようなユニークな手法で南太平洋の旧植民地をめぐる様々な問題を描いた。

『尻に接吻』 (*Kisses in the Nederends*, 1987)³⁾は、ハウオフア自身が体験した痔の苦痛とその治療をめぐる数々のトラブルを、旧植民地国家の政体や社会とその矛盾や腐敗の寓意として描き出した。ハウオフアの世界には、およそ常軌を逸した者ばかりが住んでいるように見える。ハウオフアはこのようなラブレ⁴⁾的な手法ですべての権威や固定観念を否定するのである。彼の文体は、スケッチ風の小品、大風呂敷、冗談、道化、エッセイの集合体で、おかしな直喩や暗喩に富んでいる。

ハウオフアは自分のことを、笑うのが大好きな道化、と評している⁵⁾。実際、いかにもトンガ人らしい堂々たる体軀のハウオフアは口が悪い。しかし、彼の風刺や皮肉には刺がなく、彼の対話者を、あるいは聴衆を、微笑ませたり、大笑いさせたりする。

道化 (clown, fool) の真骨頂は、己れは常に冷静で、どのような深刻な事態をも笑いとはし、人々に平衡感覚を取り戻させることである。道化は世界中のすべての文化に存在するが、南太平洋の島々では、取り分け、演技としての道化が昔から社会に浸透している。

南太平洋ではひろく宗教的儀式の枠組みの中で語られ、演じられる儀礼的道化が行なわれてきたが、キリスト教の普及とともに次第にその活力と存在理由を失っていった。しかし、たとえ社会がキリスト教化、西欧化しても、太平洋の人々は道化の文化を大切に守ってきた⁶⁾。

太平洋の人々にとって、何かを (例えば、動物など) 模倣し、人を楽しませたいという衝動は抑えがたいものであった。世俗的な道化はもともと自発的なもので、何かのお祝いや儀式に人々が集った時に即興的に演じられるものである。このような道化の典型は宴会の余興であって、宴もたけなわな頃合いに、芸達者が跳り上がって、滑稽な仕草で踊ったり、物まねをしたり、いちゃついたりして、皆んなを大笑いの渦に巻き込むという道化役を演じるのである。こうした自発的な道化はコミュニティに対する立派な貢献とみなされる。というのは、太平洋の国々では、笑いはただ快いというだけのものではなく、コミュニティの平和と安寧を表わすものであった。

これに対して、儀礼的な道化は、何んらかの儀式の中で演じられるもので、指名された特定の人物によって演じられる。道化は、身近な問題や社会的な問題を滑稽な仕草で演じてみせる。道化には身分の高い人の癖などを誇張して真似てみせたり、その言動をひやかしたりする特権が与えられている。道化は政治的な批判は決してしない。ただ権威あるものを茶化し、皮肉り、笑いの対象とするのである。

自発的な道化ではなく、いわば玄人の道化役は、例えば、結婚の披露宴などの幫間として重要な役割を果たす。人々の集うところで昔話しを、身振り手振りおかしく語って聞かせるのも道化の仕事である。

エペリ・ハウオファはその小説『タイコ島人の物語』で、軽やかな洗練された文体と、絶妙な表現を駆使して、南太平洋の小さな島の、独立国家となっても植民地根性の抜けない住民の弱さや奇行を、まるで体を成さない政治と、旧宗主国やその他の援助国まかせの経済の実情などを、面白おかしく小話仕立てで語って聞かせるのであるが、そこには道化の演技を彷彿させるものがある。

『タイコ島人の物語』 (*Tales of the Tikongs*) は次の12の物語から成る。

The Seventh and Other Days

The Winding Road to Heaven

Old Wine in New Bottles

The Tower of Babel

A Pilgrim's Progress

The Wages of Sin

Paths to Glory

The Second Coming

The Big Bullshit

Blessed Are the Meek

Bopeep's Bells

The Glorious Pacific Way

これらの表題を順番に読めば、この短篇集は全体として、キリスト教的道徳によるタイコ島民の向上心と絶えざる努力によって太平洋上にタイコという地上の楽園が生まれた、というキリスト教の説話の様式を借りていることがわかるであろう。

太平洋に浮ぶ小島にも「開発」の高波が押し寄せようとしている。そして開発には経済的援助が伴ってくる。これらは島の古い文化を破壊し、人間精神を腐らせる。時流に流される者、巧みに波に乗る者、時流に棹さず者などが登場し、それぞれ、とっぴな不思議な言動を繰り返す。これらの12の短篇は、この国の二番目に重要な人物であるが、開発と発展に反対するマヌ (Manu) の登場によってつながれており、それぞれ独立しているが、ゆるやかなまとまりのある一つのユニークな、道化の視点で描かれた小説である。

信心深いタイコの人々はキリストの教えをよく守るが、他のすべてのキリスト教国では日曜

日は、神エホバが天地万物の創造をされて、「第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なさった。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なさったので、第七の日を神は祝福し、聖別された⁷」ため、人々は仕事を休むのに、タイコ人は働くのだ。

This doesn't mean that Tiko works seven days or even five days a week. No. In order to know its ways of doing things one has to find out first in which direction the Good Lord moves and then think of the opposite of that movement. The Lord moves one way, followed by Christians everywhere, and Tiko goes in the opposite direction, all on its own. Thus if the Lord works six days and rests on the Seventh, Tiko rests six days and works on the Seventh. (1)⁸⁾

タイコ人は、神が他の国々のクリスチャンを従えてある方向に行くのを見定めてから、反対の方向に行くのである。第一話の表題「第七とその他の日」(The Seventh and Other Days)は旧約聖書の『創世記』1—2.4に基づくものであるが、タイコ人は日曜日に働く——タイコの首長シオーネ一家は地元の教会の近くに住んでいるのであるが、その教会の巨大な鐘が午前4時半に鳴り始める。それに合わせて、タイコ全土のすべての何千という教会の鐘が鳴り出し、耳に栓をして寝込んでいるマヌー人を除いて、すべての人々が教会に行く。鐘は全員が揃うまで2時間毎に鳴らされて、これを止めようがないのである。すべてのお祈りが終了するのは午後の10時である。マヌは言う

“Our people work so hard on Sunday it takes a six-day rest to recover.”(1)

タイコの首長 (Most Important Person) シオーネ・ファレシ (Sione Falesi) は聖俗合わせた最高権力者で、身長は6フィート、体重は300ポンドという偉丈夫で真のポリネシアのチーフである。熱心なクリスチャンで、日曜日には必ず教会に行き、告白して罪の許しを乞うのである。タイコの教会の数はすべての公共建造物を合わせてもその4倍に達する。彼には16人の子供がいるが、25歳の妻は妊娠している。しかし、一人も日曜日に生まれた者がいない。実際、タイコで日曜日に子供が生まれたり妊娠する者がいないのは鳴り止まぬ教会の鐘の音のためだし、また朝から晩まで教会の中にいなければならないので、いかなる罪も日曜日には犯しようがないのである。

16人も子供がいて、まだもう一人生まれることについてシオーネは ‘Didn't Jehovah tell

Abraham to produce as many issue as there are grains of sand on earth or stars in the firmament?’(3)と語り、自分は神さまのご命令に従っているのだという固い信念を持っている。従って家族計画協会(FPA=Families Planning Association)の運動には反対である。彼は月曜日から金曜日まで毎朝役所に出勤するが、秘書とトランプ遊びをして、3時になると急いで帰宅し、妻を抱いてその日を過ごす。

ある時、賢人会議のメンバーが、国土開発のために、週日にタイコ島人を働かせる可能性を調査するために外国の専門家を雇ったことがあった。彼はオーストラリアの首都キャンベラのアボリジナル担当局のマープ・ドゥリトル氏(Mr Dolittle)という男で、何人もタイコの重要人物と面会し、最後にシオーネの役所にやってきた。朝9時にオフィスに現われたドゥリトル氏が眼にしたのは秘書とトランプをしているシオーネであった。少しもあわてることなくシオーネはモーニング・ティーの時間だという。ティー・カップを目で探すドゥリトル氏にシオーネは言う。

‘You won’t see anything, Mr. Dolittle. We have no money for tea so we kill the allotted time playing cards. If you can’t feed your face you may as well fiddle with your finger.’(4)

「仕事はきついですか？」と尋ねられたシオーネは

‘Oh yes, very heavy indeed. You should see me on Sunday when I work eighteen hours non-stop for God. Life’s a burden, an enormous burden.’(4-5)

と深いため息をもらすのである。「他の日は？」と切り込むドゥリトル氏に、‘what? oh, yes. The other days, of course. well, you see, Mr Dolittle...’(5)と言ってから、そこで何かを急に思いついた様に言葉を切ったシオーネは、にやにや笑いながらドゥリトル氏に、‘Your name. Dolittle. It’s so beautiful! Heavens above, you must be one of us! Ana! Ana! Bring the cards back in!’...(5)という。ドゥリトル氏は、抗議しかけるが、考え直してそそくさと退散する。

彼が調査報告をまとめ、記者会見を行い、タイコ国の体質改善のためにプロテスタント的倫理観の導入の必要を語ったことが、ラジオで放送された時、シオーネの両耳の中の毛が伸びてきて耳を塞いでしまった。海外援助機構の所長が、機構が破産しそうだと訴えに来た時も耳の

毛が耳穴を塞いでしまうのを見て所長は舌打ちをして退散する。そのすぐ後から清掃係のリーがはいってきて、耳もとで ‘Most Respected Sir, the New Zealand Aid Delegation which came last Friday told me you’re the wisest and most handsome man in the whole world.’(6)とお世辞を囁くと、シオーネの耳穴は開き、金庫から5ドル紙幣を2枚取り出してリーの手握らせる。2週間に一度リーがやっけてお世辞を言い、シオーネから10ドルはせしめるという習慣がもう15年以上も続いているのであった。

マヌは ‘And who leads whom in Tiko?’ (6) と問い掛ける。答えが返ってくることは少しも期待はしていないが。

このマヌ (‘Manu’ はポリネシア語族で鳥類や家畜を意味する語である) はタイコではシオーネの親族であり、その特異な存在のためにこの国で二番目に有名である。彼のシャツの背中には ‘Religion and Education Destroy Original Wisdom’(7)と大書されている。彼はこの国で唯一の大真実を語る人である。だからといって島の人間が皆嘘つきだというのではない。真実は部分で現われる——大きい部分もあれば小さいものもある。しかし決して全部現われることはないのである。語り手は言う。「我々は先祖と同じように、時と場合に依じて半分の真実、4分の1の真実、1パーセントの真実を語るのである」(7)と。実際、1パーセントの真実を語るというのは難しい、ましてや1パーセント以下の真実を語るというのは不可能に近い。それが昔からタイコ国に嘘つきが殆んどいない理由である。(8)

真実は、美と同じように、真直ぐで狭いと信じている人は我が国に来るべきではない——我が国の道路は非常に狭く、曲がりくねっていて、穴だらけである。(8)このように曲がりくねった、狭い道を行く人は誘惑に陥ちやすい。誘惑に陥ち、罪を犯した者も懺悔し、悔い改める者をあわれみ深き全能の神は赦して下さる。タイコの道は司祭にさえ安全ではないが、その曲がりくねった狭い道は天国へ至る道である。マヌのシャツの背中の文字は「主に栄光あれ」と叫んでいる(第2話 The Winding Road to Heaven)。

第3話の表題「新しい革袋に古いぶどう酒を」(Old Wine in New Bottles)は ‘New wine in old bottles’ 「新しいぶどう酒を古い革袋 (に入れる者はいない)」とあるべきところ。(『マタイによる福音書』9. 17参照) この話の主人公は、マヌの遠い親戚に当たるハイティ・ジョージ六世 (Hiti George VI) という、まるで英国国王のような名前をもった男で、彼は何んでも新しい物をわざわざ古くして使うという変な趣味の持ち主である。1939年、英国王がナチス・ドイツのヒットラーに宣戦布告する数ヶ月前に生まれた息子に、誇り高い19世紀ババリアの商人の子孫であった父はヒットラー (Hitler) と命名したが、ヒットラーが英国の敵となったので Hitler の語尾の三文字を抹消し、代わりに ‘i’ を加えて Hiti としたのであ

る。更に、タイコは大英帝国の一部であったので国王に忠誠を誓うために 'George VI を加えたのである。ハイティは父が買った1940年代の中頃英国のパーミンガムで製造された古い自転車愛用しており、新しく買ったトヨタの小型セダンもわざと古くして乗っている。

彼は、有力な家族のコネで、ある役所の管理職の仕事につくが、チャールズ・エドワード・ヒギンボタムという、35才であるがふけ込んで60歳にしか見えないアドバイザーが英国から赴任する。このチャールズがタイコで見出したものはことごとく彼の職業規範に反するもので、責任感の強いチャールズはタイコ流との闘いに疲れ、やがて酒に溺れる。心身ともに衰弱したチャールズは帰国を決心する。ハイティをはじめ、全職員の盛大な見送りを受けてタイコ国際空港を出発したチャールズはタイコとオークランドの間を飛ぶ機上で死亡する(16)

マヌの開発反対のための活動は、タイコの各界の有力者に呼び掛けるだけでなく、海外から調査のために訪れる研究者や開発業者にも攻撃の鋒先が向けられる。

'Tiko can't be developed,' Manu declared, 'unless the ancient gods are killed.'
'But the ancient gods are dead. The Sabbatarians killed them long ago,' countered the ancient preacher.

'Never believe that, sir. Had they died Tiko would have developed long ago. Look around you' Manu advised.

The ancient preacher look around and saw nothing; he looked at himself, his tattered clothes, his nailed-in second-hand sandals, and nodded rather dubiously. He wished to be developed. 'And how do you slay the ancient gods?' he inquired cautiously.

'Never try, sir, it's useless,' Manu replied. 'Kill the new ones'. And that, in short, is what Manu does. He wants to keep the ancient gods alive and slay the new ones....(18)

オーストラリアの大学で最近 Ph. D の学位を取得して帰国、開発局で働いている男がある星の夜、首都トゥリシの通りを歩いていて、「バベルの塔」よりも高い塔をタイコに建てたいと願っている者達の居住区に差ししかかった時、晴天の霹靂のように、WHY ARE YOU DESTROYING MY COUNTRY? と叫ぶ刺すような鋭い声が静寂を破った。それはマヌの声であった。(19) また、ある晴れた日に、開発局の局長が自動車を運転して、大開発プロジェクトの資金5万ドルを引き出すためにタイコ銀行にやってきた時、'TIKO HATES YOU'

という猛烈な声が路上に響き渡り、局長は驚いて追げ出すという騒ぎがあった。これもマヌのゲリラ的な攻撃であった。(第四話「バベルの塔」The Tower of Babel) (19)タイコのお偉ら方が皆、(すでに開発されてしまった)セックスを除くタイコのすべてを開発することを望み、海外からの援助を求めている中でマヌは孤独な運動を続けている。(「バベルの塔」については『創世記』11: 1-9を参照)

第五話「天路歷程」(A Pilgrim's Progress)は、ジョン・バンヤンのキリスト教の寓意小説 *The Pilgrim's Progress* (1678) (『天路歷程』)を下敷にしたノエリ・マアという青年の信仰のための厳しい修養によって永遠の恍惚を獲得するまでの話である。第六話「罪の報い」(The Wages of Sin)のタイトルは『ローマの信徒への手紙』6.23の 'The wages of sin is death' (「罪が支払う報酬は死です。」)に基づいている。

この話の主人公は、寝る時以外は絶えず煙草を吸っているヘビースモーカーのタイ・パイロ・シミニー (Ti Pilo Simini) である。ある晩彼は恐ろしい夢を見た。夢にモーセとヨシュアが現われ、モーセが「お前は冒瀆の罪を犯した。ヨシュア、彼を罰せよ」と言う。ヨシュアは脇の下からダイナマイトの棒を一本抜いてタイの口にくわえさせ、火をつけるとモーセとともに空中に消え去った。ダイナマイトが爆発し、タイは大声で叫び、目が覚める。

このことがあってから、タイの夢にしばしばヨシュアを伴ってモーセが現われるようになる。ある時、モーセがヨシュアを従えてサムソンとゴリアテの押す車椅子に乗って現われた。その背後にシオニスト・パレスティナ人の平和維持軍が整列しており、サムソンの合図で、トランペットとドラムの演奏が鳴り響く。その時、新しい人物が現われて、'Ti Pilo Simini, you have done many awful things and deserved all your punishment. But you have also committed an act of equal and opposite sin which has cancelled all your other transgressions. Go home and sin no more.' と言う。(42) タイが 'equal and opposite sin' とは何か、と訊くと、私の家に来たら教えてあげよう、と言う。彼とタイの二人が空中に消え、やがて二人は天上の邸で、一杯の茶を飲み、天上の葉巻を吸った。そこで彼はタイに生と死と叡知の秘密を明らかにする。

第八話のタイトル「再臨」(The Second Coming)は本来キリストの再臨 The Advent というが、この話はタイコの独立式典の話である。第九話のタイトル ('The Big Bullsit') は卑語で「たわごと」「駄ぼら」のこと。ここでもニュージーランドやオーストラリアからの開発援助の偽善をあばくためにマヌは大活躍している。マヌは大きなプラカードを背負って島中を歩いている。プラカードには、

DEVELOPMENT IS A LIE
TIKO KNOWS SWEET BUGGER ALL
AUSTRALIAN COWS ARE QUEER
AND NEW ZEALAND BULLS CAN' T DO NO DAMN
GOOD EITHER

と大書されている。(67)

マヌの努力が全く報いられなかったのではない。第十二話「栄光に輝く太平洋の道」(The Glorious Pacific Way)の主人公オール・パシフィキウェイ(Ole Pasifikiwei)は、巧みに海外から多額の開発援助金を引き出し、その一部を文化的な事業に注ぎ込むのである。初めは、趣味で個人的に始めた口誦文学の収集であるとか、家系調査などが、やがて組織化され、そうすると資金が必要になる。

'I hear you've collecting oral traditions, good work. It's about time someone started recording and preserving them before they're lost for ever.' said the nattily dressed Mr Harold Minte in the slightly condescending though friendly tone of a born diplomat, which Mr Minte actually was. (83)

.....

'Perhaps you could do with some financial assistance,' Mr Minte suggested.

'That'll help a lot, sir.'

'We have money set aside for promotion of culture preservation projects in the Pacific. Our aim is to preserve the Pacific Way. We want to help you. (84)

オールの口誦文学収集の仕事は環境・宗教・文化・青年省(the Ministry of Environment, Religion, Culture, and Youth=MERCY)の認めるところとなり、オールの友人でもあった同省担当大臣が、開発プロジェクトの確認と資金援助の調査にタイコを訪れる外交官歓迎パーティに彼を招待したのである。

この日は、これまで人に金銭をねだったことがなかったオールが一面識のないミント氏に援助を頼んだことで自己嫌悪に陥るが、翌日ミント氏を訪ね、折衝が始まると、オールのその方面のかくれた才能が発揮されはじめるのである。彼は援助を受けるための適切な団体をつく

り、委員会を設け、また折衝に当った。

After six years Ole had applied for a total of \$14 million for his organisations, and his name had become well known in certain influential circles in Brussels, The Hague, Bonn, Geneva, Paris, London, New York, Washington, Wellington, Canberra, Tokyo, Peking, and Moscow, as well as in such regional laundry centres as Bangkok, Kuala Lumpur, Manila, Suva and Noumea. (92)

自尊心を棚上げして、もらい上手になったこの人物に南楽園大学 (The University of the Southern Paradise) のずる賢い指導者たちは無類の才能を見出し、経済学と神学と哲学の名誉博士号を授与した。もっともこの大学にはどんな種類、色、教義の哲学もなかったけれども。

かくして名声を博したオールは、与えられた自分の役割を演じている。

With fame and honour to his name, Ole Pasifikiwei immersed himself totally in the supreme task of development through foreign aid, relishing the twists and turns of international funding games. He has since shelved his original sense of self-respect and has assumed another, more attuned to his new, permanent role as a first-rate, expert beggar. (93)

因みにオールの名前 Ole Pasifikiwei はピジン・イングリッシュであろうと思われるが、'All Pacific Way'に通じる。なお 'The Pacific Way' という多分に政治的な意味合いのフレーズはフィジーの前首相で、1994年以來大統領の要職にあるカミセセ・マラ (Ratu Sir Kamisese Mara, 1920—) の造語である。

タイコ島の人々は、民主的で自由な政治を行い、文化的な活動も盛んであるように見えるが、これらすべてが旧宗主国及びその他の援助国からの財政的支援によって為されているのである。人々はその事実に慣れ、「太平洋流儀」と称して満足しているようである。タイコ島のような南太平洋に浮ぶ資源もない小さな島国が、植民地主義的な惰性から脱して、「太平洋流儀」に甘えず、自立するにはどうすればよいのか。タイコ島人のように、「The Pacific Way」を、さまざまな苦勞を重ねたらうえ、やっと到達できた太平洋の樂園とみなすべきか。

註

- 1) アルバート・ウェント (Albert Wendt, 1939—)
- 2) *The Tales of the Tikongs*. First published by Longman Paul 1983. Published by Penguin Books 1988. Published by Beake House 1993. Published by University of Hawaii Press 1994.
- 3) *Kisses in the Nederends*. First published by Penguin Books 1987. Published by University of Hawaii Press 1996.
- 4) See: Subramani, *South Pacific Literature: From Myth to Fabulation*, Revised Edition, 1992, p. 187.
- 5) See: *Editor's Note* to The University of Hawaii Press edition of the text. p. vii
- 6) See: 'Pacific Clowning' by Vilsoni Hereniko. (an appendix to *Last Virgin in Paradise* by Vilsoni Hereniko and Teresia Teaiwa. Mana Publications 1993)
- 7) 『新共同訳聖書』財団法人日本聖書協会1987による。
- 8) 以下 *Tales of the Tikongs* からの引用はハワイ大学出版局版により数字はその頁を示す。

参考書目

- Eugene Benson and L. W. Conolly, eds. *Encyclopedia of Post-Colonial Literatures in English*. 2vols. Routledge, London and New York, 1994.
- Vilsoni Hereniko, 'An Interview with John A. Kneubuhl' in *Mānoa* Vol. 5, No. 1, Summer 1993.
- *Woven Gods: Female Clowns and Power in Rotuma*. University of Hawaii Press, 1995.
- and Teresia Teaiwa, *Last Virgin in Paradise: a serious comedy*. Mana Publications, Suva. 1993.
- 'Representations of Cultural Identities in *Tides of History: The Pacific Islands in the Twentieth Century*, edited by K. R. Howe, Robert C. Kiste, and Brij V. Lal. University of Hawaii Press, 1994.
- Paul Sherrad, ed., *Readings in Pacific Literature*, New Literatures Research Centre, University of Wollongong, Wollongong, Australia 1993.
- Subramani, *South Pacific Literature: From Myth to Fabulation*, Revised Edition. Institute of Pacific Studies of the University of the South Pacific, Suva, Fiji, 1992.
- Albert Wendt, ed. *Nuanua: Pacific Writing in English Since 1980*. University of Hawaii Press, Honolulu, 1995.
- 安川 昱 「南太平洋の劇作家ヴィルソニ・ヘレニコ——その人と作品について——」(『関西大学文学論集』第45巻第1号, 1995) pp. 29—44.
- 「アジア・太平洋の新しい英語文学の研究(1)——太平洋地域の英語文学——」(『英文学論集』第35号, 関西大学英文学会, 1995) pp. 100—114.